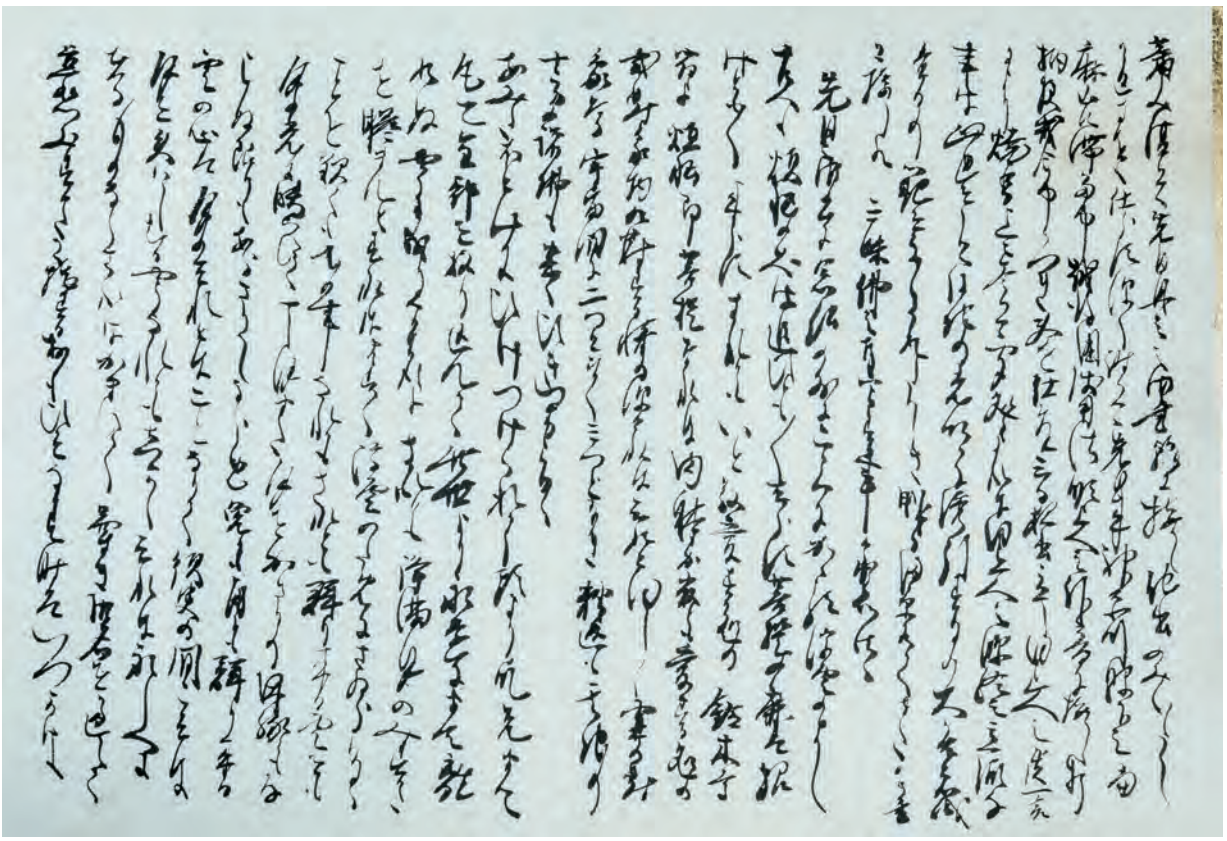
新発見光明資料 42

ひかり編集室
金田昭教



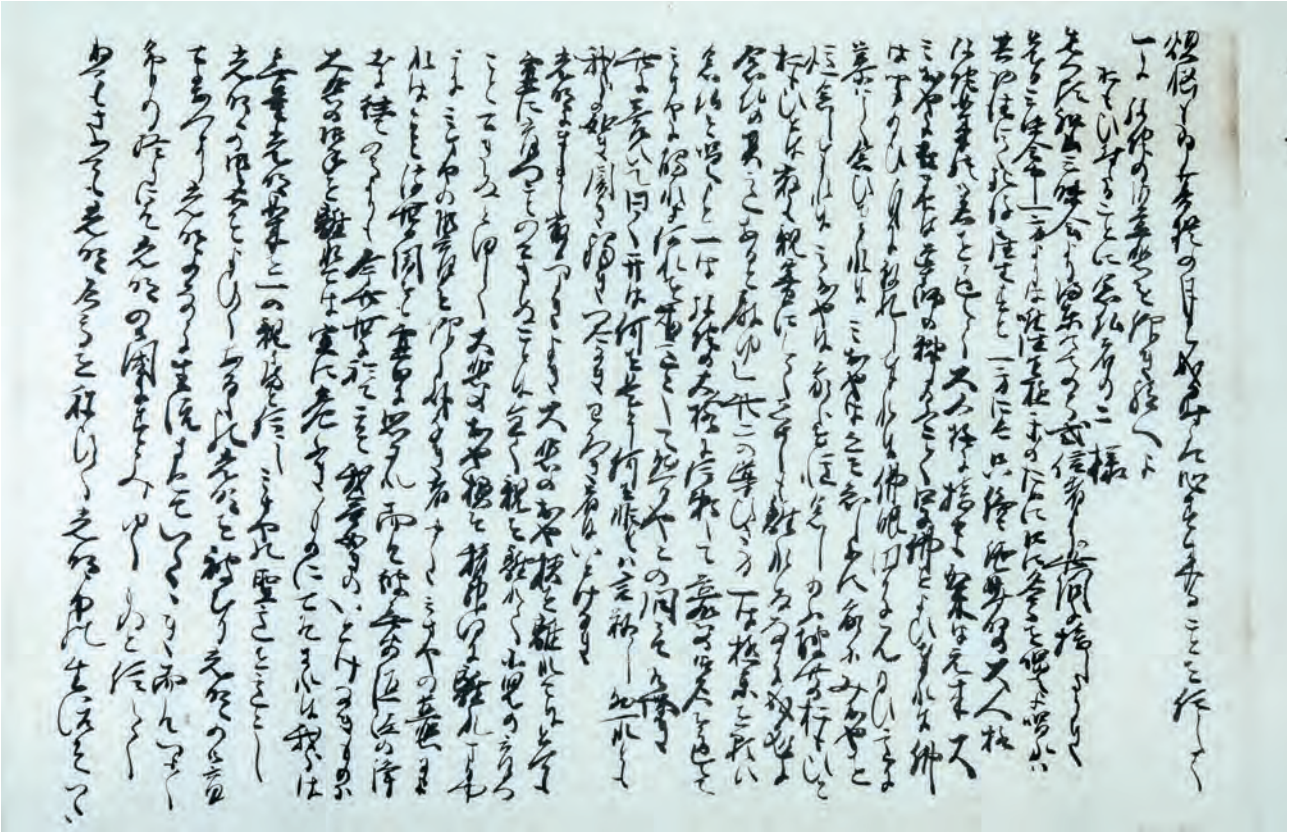
今回より弁栄上人遺弟の鈴木憲栄上人宛の書簡を掲載します。『御慈悲のたより』や『辨栄上人書簡集』に既出の書簡であり「新発見」とは言えませんが、原本は初公開となりますのでここで紹介させて頂きます。

鈴木憲栄上人宛書簡　その一

蕭み復上候。先日再三の御書翰に接し、他出のみいたし御返事をも仕らず深く謝上候。先日来神奈川県下の当麻山に滞留中、越後国浅井法順上人の訃音に接し、折柄授戒会中につき夫を仕舞、三日夜出立し、同上人の遺言により焼香迄に参り候。聞処によれば、同上人の臨終の立派な事は四辺をして弥陀の光明に誘引するの大善知識たるの範をなされたりき。昨日帰京候てまたの御書に接し候。三昧仏の拝写する事承知仕候。

先日の御書に念仏の外にこころにかかる浮雲のよし、古人も煩悩の犬は追えども追えども去らず、菩提の鹿は招けども招けども来らず、されどもいと敬愛する処の鈴木尊宿よ、煩悩即菩提なれば、肉体が最も愛する処の或対象物に対する情が深ければ、それと同じく霊の対象たる宇宙間に二つとなく三つとなき釈迦も、其他の十方の諸仏も悉くひきつけらるる。

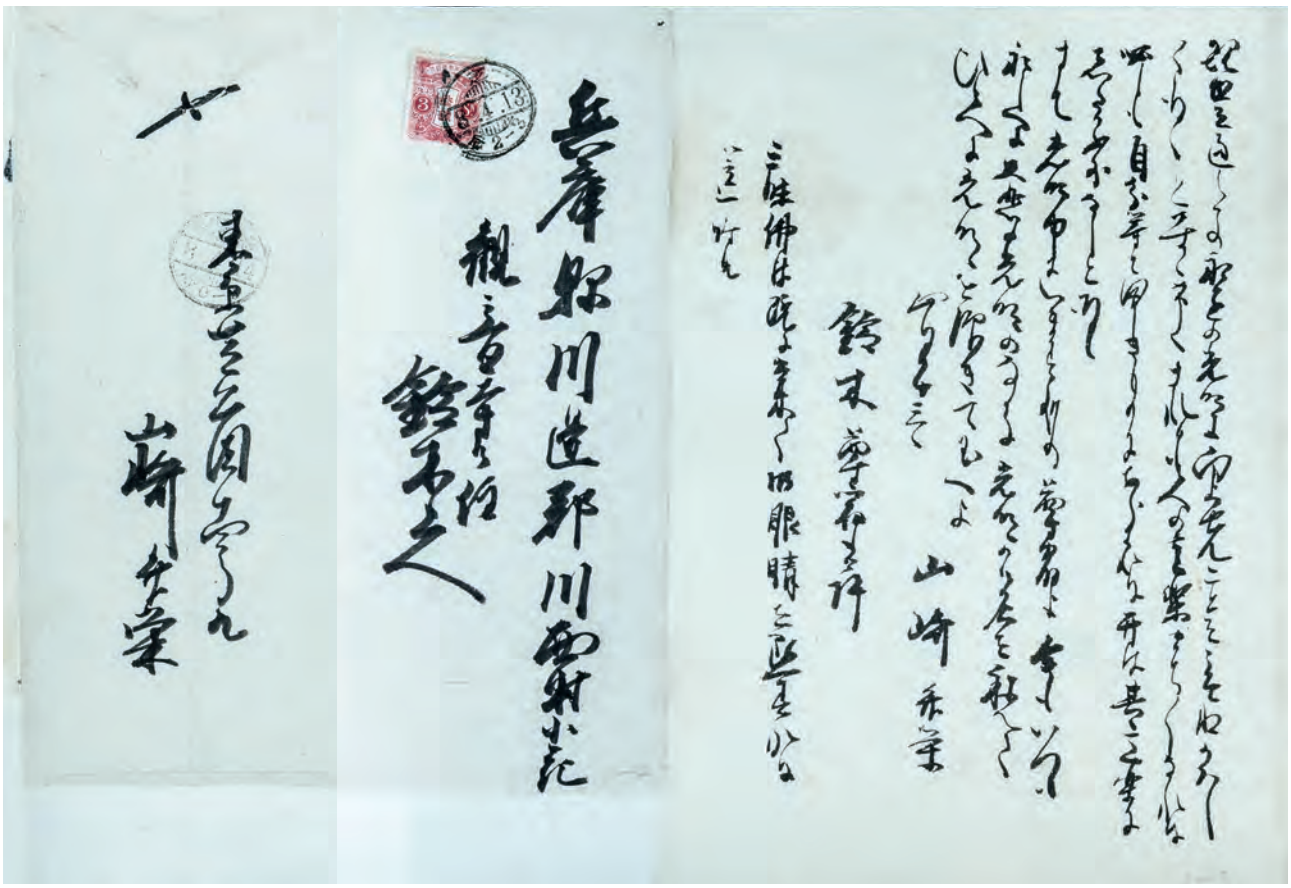
あみだほとけにひきつけられて頭より爪先まで凡て全部を投げ込んで、此世より永遠にまで離れぬように成りなされよ。されども浄満月のみすがたを瞻まんとすれば、ますます浮雲のためにさえらるることを歎くも尤の事なれども、されども群り来る雲をも月の光に映ろいて、一しおまた月をかざるの因縁ともならぬ限りもあら



ざりしならめ。兎にも角にも群り来る雲の心は月のそれとはことなりて、須臾の間こそは月を失わしむるようなれども、しかしそれは永しえに在るものならざれば、かまえて尊き御名を通して慈悲〔の〕みすがたに接するおもいをなす時は、いつかは煩悩も即菩提の月と成る時は必ず来ることを信じて一に弥陀の御慈悲を仰ぎ給えよ。

おもい付たることに念仏者の二様

先つ頃祖山三昧会より帰東候てのち、或信者よりの此問に接したりき、先日三昧会中一方よりは唯往生極楽のために口に名号を唱えよ、唱うれば其功徳にて死後に往生すと。一方には只偏に絶対的の大人格弥陀如来の御名を通して大人格に接せよ、如来は元来大ミオヤに在ませば、導師の釈し玉うごとく、口に仏をよび奉れば仏は聞玉い、身に敬礼し奉れば仏眼円かに見玉い、意に慕わしく念い奉ればミオヤは之を知しめす、我がミオヤを憶念し奉ればミオヤは我らを憶念し玉う、彼此のおもいとおもいとは最も親密にしてしばしも離れぬなかに成処に念仏の真意あると教ゆ。此二の導びき方、一は極楽を願い念仏を唱えよと、一は弥陀の大人格に信頼して慈悲の御名を通してミオヤに触れよ。何れを本意として然るやとの問にて候いき。此に答えて曰く、其は何を是とし何を非とは言難し。然れども我らの如き闇き弱きつたなきわろき者はいとけなき、光明にましまし最とつよきよき大悲のおや様を離れてはとても霊に育つことのできぬことは、全く親を離れて小児の育つことできぬと同じく、大悲のおや様を精神的に離れざるようにミオヤの御育を仰ぐ外なき者、またミオヤの慈悲によればこそ浮世の闇をも霊的に照され、而して彼無為泥洹の浄土に往てのちよりも、今此世に於てこそ我等如きのいとけなきものは、大悲の御手を離れては実に危うきものにて候。されば我らは無量光明如来を一の親さまと信じ、ミオヤの聖意を意とし、光明の御名をよびてあなたの光明を被むり、光明の御育てにあずかり、光明のなかに生活させていただき、而していよいよ命の終りには光明の御国にすすみゆくものと信じて、ねてもさめても光明名号を称えて、光明中の生活をいた〔し、〕



現世を通しての永遠の光明に向上せんことをこそねがわしく存候と御すすめ申候。されども人の意楽まちまちなれば、必ずしも自分等と同じきものにあらざれば、其は其意楽にしたがう外なしと存候。

さて光明中にいます処の尊宿よ、今もいつも永しえに大悲の光明のなかに光明の御名を称えて、ひとえに光明を仰ぎて玉えよ。

四月十三日　山崎弁栄

鈴木尊宿の御許

三昧仏は既に出来て、御眼晴を点ずれば御送付候。

〈封筒表〉　兵庫県川辺郡川西村小花　観音寺御住　鈴木上人

〈消印日〉　大正八年四月十三日

〈封筒裏〉　東京芝公園十四号九　山崎弁栄

備考　この書簡は鈴木憲栄上人宛の書簡であり、『辨栄上人書簡集』五四〇頁、『御慈悲のたより』上巻の四二七頁、同書下巻の五九頁、『ミオヤの光』縮刷版一巻の一〇〇頁、同書三巻の一四二頁に掲載されている。

底本　原本とする。

相異　『御慈悲のたより』とはかなりの相異があるが、『辨栄上人書簡集』とは送りがなや訛りの修正などが多く、大きな相異はない。ただ、今後のため、翻刻に少しでも疑問のある箇所は緑色の文字にしている。